

「明治から鉄道はしるこの里に」



片町線は、明治28年8月に開通しました。当初は、浪速鉄道という私設鉄道として開業し、片町・四条畷間を運行、停車場は放出、徳庵、住道でした。所要時間は約39分、運賃は八銭、特等はその2倍でした。ちなみにそば一杯は二銭ほどだったそうです。その当時の物価からすれば、運賃は決して安いとは言えませんが、開業当日は、未知の乗り物に興味津々の人々で、駅とその周辺は、大変な騒ぎだったようです。

浪速鉄道は、開業して間もない明治30年に、関西鉄道と合併し、その後明治40年に国有化されるまで、片町線は関西鉄道により運営されることになりました。



市民学芸員展で展示している
住道駅前のジオラマ

関西鉄道は、合併後すぐに四条畷・津間の敷設工事に着手し、明治31年に同区間が開通しました。翌年には、野崎駅が仮停車場として開業し、野崎参りのシーズンを中心にして利用されました。野崎駅は、明治45年になると常設の停車場となり、同じ日に鴻池新田駅も新たに開業しました。

片町・四条畷間は関西の国鉄としては、いち早く昭和7年に電化され、所要時間の短縮と増発が実現し、より効率的に運転が行えるようになりました。

昭和23年の住道駅の年間乗降人数は約130万人、5年後には約24万人に増加しています。住道駅近くには、明治時代より鐘ヶ淵紡績の住道工場があり、昭和25年には三洋電機住道工場が設立され、さらに駅の利用者は増えました。住道駅では、現在でも一日平均6万人以上の乗降者があり、にぎわいを見せています。

歴史民俗資料館では、3月17日まで、市民学芸員展「こんな大東みつけた」を開催中です。この中で、昭和30年代の住道駅前のジオラマを手作りで制作し、展示しています。

(大東市立歴史民俗資料館)